

患者の病いの体験の意味づけに関する 文献レビュー

竹山 広美¹⁾・掛橋千賀子²⁾

Deriving the Meaning of the Illness Experience of Patients: A Literature Review

Hiromi Takeyama and Kakehashi Chikako

要旨

研究目的は、患者の病いの体験の意味づけに関する文献レビューを行い、患者の病いの体験の意味づけの特徴を明らかにすることである。医学中央雑誌Web版、CiNii Articlesをデータベースで「意味づけ」、「患者」をキーワードに検索した。該当する論文9件の患者の病いの体験の意味づけに関する内容を抽出し、意味内容の類似性に従って分類を行った。結果、対象者は肺や乳がん、狭心症、視覚障害のある糖尿病患者などであった。がん患者の病いの体験の意味づけは、「がんとの向き合い方を見出す」「周囲の支えに感謝する」「これからの生き方を見出す」「自分らしく生きたい」「生きている実感・生きる意味に気づく」「人生の締めくくりと来世への思い」の6つに分類された。がん以外の患者の病いの体験の意味づけは、「病いとの向き合い方を見出す」「周囲のサポートに感謝する」「病いとの生活を見出す」「新たな気づき」の4つに分類された。周囲の支援に感謝するなど共通した意味づけがされている一方で、がん患者は、進行がんという現実を受けとめ、時間の有限性や自己存在を再認識し、がんに罹患しても変わらない自分で在りたい、最期まで自分らしく生きたいと意味づけていた。

キーワード：意味づけ、患者、がん患者、病いの体験

1) 姫路大学大学院 看護学研究科 博士後期課程、広島国際大学看護学部

2) 姫路大学大学院 看護学研究科

Abstract

To clarify the characteristics of deriving the meaning of the illness experience of patients, a literature review was conducted using the Ichushi Web and CiNii Articles databases with 2 keywords, “meaning” and “patients”. From 9 papers identified, contents regarding deriving the meaning of the experience among patients were extracted and classified based on semantic similarities. Lung and breast cancers, angina pectoris, and diabetes involving visual impairment were the most common diseases. The meaning of the experience among cancer patients was classified into 6 categories: <finding a way of facing cancer>, <appreciating support from others>, <finding a way of living the rest of my life>, <wishing to live in my own way>, <realizing that I am alive/the meaning of life>, and <desiring to end my life well and believing in the hereafter>. The meaning of the experience among the other patients was classified into 4 categories: <finding a way of facing the illness>, <appreciating support from others>, <finding a way of living with the illness>, and <obtaining new realizations>. Appreciation for support from others was observed in both groups. On the other hand, cancer patients were characterized by the acceptance of advanced cancer as their reality, re-recognition of temporal finiteness and their own existence, and desired to remain unchanged even after cancer progression and live in their own ways until the end of their lives.

Key words: meaning, patients, cancer patients, illness experience

I. はじめに

がんは全部位全臨床病期の5年相対生存率が67.9%に達する¹⁾など、医療の進歩により長期生存を可能にしてきた。がんも患者自身がセルフモニタリングし治療と就業を両立するなど病気と共生していく慢性疾患のひとつである。慢性疾患は突然の発症、無症状で進行するなど経過や日常生活への支障の程度に関しても多様な様相を呈する。突然発症して後遺症を残す可能性のある脳卒中や徐々に身体障害が進行する神経疾患などのようにこれまでできていたことができなくなることは、社会での自分の存在意義に対する喪失感となるなど心理・社会的にも影響する。医療は病気を診断し、治療するという身体面だけでなく、苦悩

のただ中にある患者の死への不安、生きる意味への問いなど心理・社会面やスピリチュアルな側面にも目を向ける必要がある。価値観、生き方も多様化している中、患者の体験を理解し、病気と共にある生活に適応できるよう支援することは重要である。

Benner et al.²⁾は、治療の手立てがなく、治るのは無理という場合でさえ、患者とその生活にとって病気がもつ意味を理解することは癒しの一形態であると述べている。またPark³⁾は、信念や目標などの包括的意味とストレスフルな出来事の意味の評価の間に矛盾や不一致が生じているとき苦痛を解消するために意味づけを行うとしている。このことは、患者が病いの体験を意味づけることは苦悩な出来事に適応していく一つの手立て

になることを示唆しているといえる。患者の病いの体験の意味づけに関する文献レビューをすることで、様々な患者の体験を意味づける支援に役立つと考える。

国内では1990年代からがん患者や筋萎縮性側索硬化症患者の病気の意味を見だしていくプロセス^{4) 5)}などの研究がされてきた。海外の先行研究では、がん体験を意味づけるプロセス^{6) 7)}やがんの対処との関連^{8) 9) 10)}などの研究はされていたが、病いの体験の意味づけを明らかにしている論文はなかった。そのため本研究の目的は、国内の論文を対象に患者の意味づけに関する研究の動向や患者の病いの体験の意味づけの特徴を明らかにすることとした。

Ⅱ. 用語の定義

本研究における患者の病いの体験の意味づけとは、Travelbee¹¹⁾の「病気とは、もし病人がこの体験のなかに意味を見いだすよう援助を受けるならば、その病人にとり自己実現の体験となりうるような生活体験である」に基づき、患者が罹患したことに伴う苦難な体験の理由や生きるための目的を探究することを通して、病いの体験を肯定的に受けとめ、新たな生き方を見出していくこととする。

Ⅲ. 方法

1. 対象論文

医学中央雑誌Web版 (Ver.5)、CiNii Articlesをデータベースで会議録を除く原著論文とし、2019年3月までの論文を対象に「意味づけ」and「患者」and「病い or 体験」をキーワードに検索した。しかし、ヒット件数が少数であったため、「意味づけ」and「患者」をキーワードに再度検索を行っ

た結果、医学中央雑誌Web版409件、CiNii 165件がヒットした (2019年4月現在)。その内、対象者が家族や看護師など患者でないもの、病いの体験に関する意味づけではないものは除くと医学中央雑誌Web版8件、CiNii 5件となった。さらに重複する論文を除き、患者の病いの体験に関する意味づけがされている論文9件を選択した。

2. 分析方法

対象文献を整理するため、対象者を「がん患者」とがん以外を「非がん患者」とし、発行年、筆頭著者、タイトル、研究方法、対象者の項目でまとめた。さらにそれぞれの文献の中で患者が自分の病いの体験を意味づけている内容についてカテゴリ化している部分を抽出し、前後の文脈から意味を損なわないように意味内容の類似性に従って分類を行った。

3. 分析の信頼性の確保

分析にあたっては、共同研究者と検討を行い信頼性、妥当性の確保に努めた。研究者間で分類の判断が困難な場合には、繰り返し討議を行い、検討を重ね決定した。

Ⅳ. 結果

1. 患者の意味づけに関する研究の概要 (表1・2)

がん患者を対象とした論文は、2002～2015年の6件であり、非がん患者は2008～2018年の3件であった。分析方法は、質的帰納的6件、現象学的アプローチ2件、Grounded Theory Approach 1件で全て質的研究であった。対象者のがん種は、肺がん4件、乳がん2件などであり、肝臓がん1名以外は再発や進行がん患者を対象としていた。非がんでは、経皮的冠動脈インターベンション (percutaneous coronary intervention: 以下、PCI) を受けた狭心症や視覚障害のある糖尿病、未破裂脳動脈

表1 がん患者の病いの体験の意味づけに関する文献

文献 記号	筆頭著者 発行年	タイトル	研究方法	対象者
a	田中まゆこ (2015)	外来で化学療法を受ける進行がん患者のアドヒアランス行動とその意味づけ	質的帰納的	大腸・膵・肺・乳がん（進行がん） 化学療法，男性5名，女性5名， 40～70歳代
b	川端 愛 (2015)	がんの集学的治療を断念した患者を支える希望の意味	現象学的 アプローチ	膵・肺・子宮がん（進行がん） 手術・放射線・化学・免疫療法， 女性4名，50～60歳代
c	竹山 広美 (2015)	進行肺がん患者の病いの体験の意味づけに関する研究	質的帰納的	肺がん10名（ⅢA，ⅢB，Ⅳ） 化学療法，男性8名，女性2名， 50～70歳代
d	竹山 広美 (2013)	化学療法を継続して受けている肺がん患者の病いの体験の意味づけを促す援助	質的帰納的	肺がん（進行がん） 手術後，化学療法，男性1名， 60歳代
e	矢ヶ崎 香 (2007)	外来で治療を続ける再発乳がん患者が安定した自分へ統合していく体験	現象学的 アプローチ	乳がん（再発進行がん） 手術・補助療法後，再発しホルモン・ 化学療法，女性4名，30～60歳代
f	雲 かおり (2002)	肝臓がん患者の苦難の体験とその意味づけに関する研究	Grounded Theory Approach	C型肝炎から発症した肝臓がん 再発回数：初回，2回，6回 男性3名，60歳代

表2 非がん患者の病いの体験の意味づけに関する文献

文献 記号	筆頭著者 発行年	タイトル	研究方法	対象者
g	播磨 理紗 (2018)	経皮的冠動脈インターベンションを受けた狭心症患者の生活の編みなおし	質的帰納的	狭心症，経皮的冠動脈インターベンション後 男性6名，70～80歳代
h	藤島 麻美 (2009)	未治療の病いをもちながら生きる体験－SOC理論を用いた質的データ分析の試み－	質的帰納的	未破裂脳動脈瘤，経過観察中 女性7名，40～70歳代，
i	高樽 由美 (2008)	糖尿病で視覚障害をもつ人の生活の編みなおし	質的帰納的	視力障害のある糖尿病，視力0.6以下（全盲除く），男性8名， 女性2名，30～60歳代

瘤（unruptured intracranial aneurysms：以下，UIA）の患者であった。

2. がん患者の病いの体験の意味づけ

がん患者を対象とした論文6件を選択し，病いの体験を意味づけている28のカテゴリを抽出し，「がんとの向き合い方を見出す」「周囲の支えに感謝する」「これからの生き方を見出す」「自分らしく生きたい」「生きている実感・生きる意味に気づく」「人生の締めくくりと来世への思い」の6つに分類できた（表3）。以下，対象論文の意味

づけている内容についてのカテゴリを【】，分類したものを「」をとって示し，がん患者の病いの体験の意味づけについて述べる。

1) がんとの向き合い方を見出す

「がんとの向き合い方を見出す」とは，がん罹患したことを受けとめ，時間の有限性や自己存在を再確認し，がんとの向き合い方を見出していくことを意味する。

進行がん患者は，病状は厳しい状況ではあるが【生きることを諦めない】，がんの集学的治

表3 がん患者の病いの体験の意味づけ

分 類	意味づけ	文献記号
がんとの向き合い方を見出す	生きることを諦めない	a
	がんでも健康であり続けたい	a
	「限りある時間」と「固有の自己存在」	b
	つながりの意味づけ	b
	他者に委ねる	f
	開き直る	f
	言い聞かす	f
周囲の支えに感謝する	周囲の支えを実感する	c
	周囲の支えを感じる	f
これからの生き方を見出す	新たな生き方を見出す	c
	今までの生き方を保つ	c
	治療を受けるための体力づくり	d
	治療に希望を持ち取り組む	d
	現実を受け入れて、現在を生きていく	e
	病気と共に生きる	f
	生き方を見出す	f
自分らしく生きたい	病でも自分で在りたい	a
	私で在ることの肯定	b
	自分らしく生きること	d
	他者とのつながりを通して、自分らしく生きていく	e
	生きてきた過程を確認する	f
	自分を信じる	f
	信念を貫く	f
生きている実感・生きる意味に気づく	生きている喜びに気づかされる	c
	生きる意味に気づく	c
	命をいとおしむ	f
人生の締めくくりと来世への思い	新たな未来の見通し	b
	人生の締めくくりの準備をする	c

療を断念した進行がん患者は、限りある命という覚悟から【限りある時間】と【固有の自己存在】と意味づけていた。また、C型肝炎から発症した肝臓がん患者は自分の力ではどうすることもできない苦しみを、なるようになると【開き直る】や、【他者に委ねる】と医師・医療技術を信頼し、【言い聞かす】と罹患したことや死をも受け入れようとしていた。

2) 周囲の支えに感謝する

「周囲の支えに感謝する」とは、がん罹患

し、治療を継続する中で家族や友人、医療従事者など周囲の支えに感謝し、同病者の存在を闘病の励みにしていたことを意味する。

肝臓がんや進行肺がん患者は、家族や友人・医療従事者の支えへの感謝、同病者の存在を闘病の励みとし、【周囲の支えを感じる】、【周囲の支えを実感する】と意味づけていた。

3) これからの生き方を見出す

「これからの生き方を見出す」とは、がん罹患したことや治療を受けとめ、がんと共にあ

る生き方を見出していくということを意味する。

進行がん患者は、がんと付き合っていく方法を模索しながら【新たな生き方を見出す】、今までの自分の生き方の大切さに気づき、【今までの生き方を保つ】と意味づけていた。転移や再発を体験する中で【治療を受けるための体力づくり】をし、標準治療と経済的に可能な限り代替療法も取り入れ【治療に希望を持ち取り組む】と意味づけていた。また、がんは自分には解決できないものなどと捉え【病気と共に生きる】と決意し、死を身近に感じるような厳しい状況であっても【現実を受け入れて、現在を生きていく】と現在に価値を置く意味づけをしていた。

4) 自分らしく生きたい

「自分らしく生きたい」とは、がん罹患しても変わらない自分で在りたい、最期まで自分らしく生きたいことを意味する。

がん罹患し健康観や人生観が変化していく状況を【病でも自分で在りたい】、最期までただひたむきに生きる自分で在りたいと【私で在ることの肯定】をしていた。また、【他者とのつながりを通して、自分らしく生きていく】と自分の役割を一生懸命に取り組んでいた。肝臓がん患者は、何事にも負けないとこれまでの生き方や【信念を貫く】、自分を前向きと捉え、苦しみを克服できることを確認し【自分を信じる】と意味づけていた。

5) 生きている実感・生きる意味に気づく

「生きている実感・生きる意味に気づく」とは、進行がんであることから死を意識し、生きる意味に気づき、生きている喜びを感じることを意味する。

進行肺がん患者は、自分らしい生き方を探り

【生きる意味に気づく】、今、生きていることを意識し、【生きている喜びに気づかされる】と意味づけていた。肝臓がん患者は【命をいとおしむ】と治癒や生き長らえることを願い、生きていることに喜びを感じていた。

6) 人生の締めくくりと来世への思い

「人生の締めくくりと来世への思い」とは、進行がんであることを受けとめ、限りある生を予測し、人生の締めくくりの準備や来世を思うことを意味する。

進行肺がん患者は、限りある生を予測し、自分の【人生の締めくくりの準備をする】と意味づけていた。がんの集学的治療を断念したがん患者は、最期まで強く生きた自分の姿を遺したい、「来世」の自分に「夢」を託したいと【新たな未来の見通し】と意味づけていた。

3. 非がん患者の病いの体験の意味づけ

非がん患者を対象とした論文3件を選択し、病いの体験を意味づけている13のカテゴリを抽出し、「病いとの向き合い方を見出す」「周囲のサポートに感謝する」「病いとの生活を見出す」「新たな気づき」の4つに分類できた(表4)。以下、対象論文の意味づけている内容についてのカテゴリを【】、分類したものを「」として示し、非がん患者の病いの体験の意味づけについて述べる。

1) 病いとの向き合い方を見出す

「病いとの向き合い方を見出す」とは、これから長く続くであろう病いとの向き合い方を見出していくことを意味する。

残存病変があり完治していない狭心症患者は【精神的に不安定だが自分との闘いだと思っている】、UIA患者は一旦死を意識したことで生命の有限性を認識し、病いによって新たな人生を再構築する術を考え【死を意識した緊張感が生きることへとつながる】と意味づけていた。

表 4 非がん患者の病いの体験の意味づけ

分 類	意味づけ	文献記号
病いとの向き合い方を見出す	精神的に不安定だが自分との闘いだと思っている	g
	死を意識した緊張感が生きることへとつながる	h
	目が見えていた世界にもどることはできない	i
	目が見えない生活をするための心構えができた	i
	病気が悪いから今の状況になっても仕方ない	i
	最期まで目が見えるようにしたい	i
周囲のサポートに感謝する	助けてもらった人の恩に報いなければならない	i
	周りのサポートのおかげで今の自分がある	i
病いとの生活を見出す	心臓に負担をかけないようにしようと思っている	g
	病気を抱えながらも自分の望む人生を送りたいと思っている	g
新たな気づき	家族関係の変化は病気のメリットだと捉える	h
	以前よりも人に優しくなる	h
	目が見えなくなったことで目の見えない人の気持ちが理解できた	i

糖尿病で視覚障害があることを【目が見えない生活をするための心構えができた】と自分の生活の一部として受け入れる受けとめと、【病気が悪いから今の状況になっても仕方ない】という諦めを意味づけていた。

2) 周囲のサポートに感謝する

「周囲のサポートに感謝する」とは、合併症によって視覚障害のある現状を受けとめ、周囲のサポートに感謝することを意味する。

糖尿病患者は、視力が低下している自分にとってのサポートが持つ意味に気づき、【周りのサポートのおかげで今の自分がある】と感謝し、【助けてもらった人の恩に報いなければならない】と意味づけていた。

3) 病いとの生活を見出す

「病いとの生活を見出す」とは、病気とともにある生活を受け入れ、自分の望む人生を送りたいことを意味する。

PCIを受けた狭心症患者は、今後、【心臓に負担をかけないようにしようと思っている】、病気はあっても人生を謳歌したいなど【病気を抱えながらも自分の望む人生を送りたいと思っ

ている】と意味づけていた。

4) 新たな気づき

「新たな気づき」とは、罹患したことや合併症による変化も受けとめたことで得られた新たな気づきを意味する。

視覚障害のある糖尿病患者は【目が見えなくなったことで目の見えない人の気持ちが理解できた】とこれまで意識していなかったことに気づいていた。UIAによって家族同士が話す機会が増え、お互いを思いやり【家族関係の変化は病気のメリットだと捉える】、辛い時期を過ごした経験から思いやりや恩返しをしようとする自己の気持ちの変化を認識し【以前よりも人に優しくなる】と意味づけていた。

V. 考察

1. 患者の病いの体験の意味づけに関する研究の動向

患者のがん種は、肺がんや乳がん、子宮がんなどが対象とされており、再発していない肝臓がん患者1名を除いて再発や進行がん患者であっ

た。がんの死亡数は、肺がん、大腸がんの順に多く、乳がんや子宮がんは40歳代女性の罹患率が高い²¹⁾。再発・進行がんであることや、仕事・家事などと両立して治療を継続する患者は、身体的苦痛だけでなく、様々な心情や社会的・スピリチュアルな苦痛が考えられる。非がんの対象者は、狭心症や未治療のUIA、合併症による視覚障害のある患者などであった。このような患者が対象とされているのは、長期的な療養生活の中で行動変容を要する疾患や根治困難、身体的な障害のある患者の体験とその意味を理解したうえで支援する必要性などが影響していることが考えられる。

2. 患者の病いの体験の意味づけの特徴

集学的治療を断念したがん患者は、限りある命という覚悟から【限りある時間】、進行がん患者は、がん罹患し健康観や人生観が変化していく状況を【病でも自分で在りたい】、また死を意識し自分らしい生き方を探り【生きる意味に気づく】、【生きている喜びに気づかされる】と意味づけていた。心不全などは一般的には増悪寛解を繰り返すが、がんは治療不可能な病状進行の時期は比較的明確であることが多く²²⁾、なかでも進行がん患者は、転移や全身状態により標準治療が行えないことも受けとめなければならない。角田ら²³⁾は、死を認知した再発・進行がん患者が希望を見出すプロセスの中で、「ごく普通の日常が残された時間の希望と気付く体験」があったことを報告している。進行がん患者は、根治が困難で死を意識する苦難な状況であっても最期まで自分らしく生きたいと願い、日常の中に希望を見出すことで生きる意味や生きている喜びに気づくなどの意味づけをしていたことが考えられる。これらの病いの体験の意味づけは、進行がん患者の特徴のひとつといえる。

病いとの向き合い方について、残存病変があり

完治していない狭心症患者は【精神的に不安定だが自分との闘いだと思っている】、UIA患者は【死を意識した緊張感が生きることへとつながる】と意味づけていた。このように発症や再発が生命にもかかわる疾患の患者は、緊張感や不安との闘いと捉えていることが考えられる。また、C型肝炎から発症した肝臓がん患者は【開き直す】、医師・医療技術を信頼し【他者に委ねる】、罹患したことや死をも受け入れようと【言い聞かす】と意味づけていた。内田ら²⁴⁾のHCV由来肝硬変・肝がん患者は、最初に死を意識した以後は治療によって繰り返し継ぎ足されていく命であると語っていた。C型肝炎から肝臓がんを発症するまでの経過は長く、肝がんを発症後、肝動脈化学塞栓療法など治療と再発を重ねるなどの経過や治療などが影響し、がんであることを納得させ、医師や医療に委ねていることが考えられる。また、がん患者の【周囲の支えを感じる】や、視覚障害のある患者の【周りのサポートのおかげで今の自分がある】など家族や友人など重要他者の支援への感謝は、がん・非がん患者ともに共通した意味づけであった。

VI. 結論

がん患者の病いの体験の意味づけは、「がんと向き合い方を見出す」「これからの生き方を見出す」「自分らしく生きたい」など6つに分類された。非がん患者の病いの体験の意味づけは、「病いとの向き合い方を見出す」「病いとの生活を見出す」など4つに分類された。がんやがん以外の患者とも共通した意味づけがされている一方で、進行がん患者は、がん罹患しても変わらない自分で在りたい、最期まで自分らしく生きたいと意味づけていた。

本稿の一部は第34回日本がん看護学会学術集会で発表したものに加筆修正を加えたものである。

利益相反 申告すべき利益相反はない。

VII. 文献

- 1) 国立がん研究センター：全がん協加盟がん専門診療施設の診断治療症例について，2019年9月5日，https://www.ncc.go.jp/jp/information/pr_release/2019/0409/press_release20190409_01.pdf
- 2) Benner, P., Wrubel, J. / 難波卓志訳：現象学的人間論と看護，医学書院、東京，11，1999
- 3) Park, C. L.: Making sense of the meaning literature: An integrative review of meaning making and Its effects on adjustment to stressful life events, *Psychological Bulletin*, 136 (2), 257-301, 2010
- 4) 片平好重：がん患者が病いの意味を見いだしていくプロセスに関する研究，死の臨床，18，41-47，1995
- 5) 村岡宏子：筋萎縮性側索硬化症患者における病いを意味づけるプロセスの発見，日本看護科学会誌，19 (3)，28-37，1999
- 6) O'Connor, A. P. Wicker, C. A., Germino, B. B.: Understanding the cancer patient's search for meaning, *Cancer Nursing*, 13 (3), 167-175, 1990
- 7) Leung, P. P. Y.: Autobiographical timeline: A narrative and life story approach in understanding meaning-making in cancer patients, *Illness, Crisis & Loss*, 18 (2), 111-127, 2010
- 8) Rosenberg, A. R., Yi-Frazier, J. P., Wharton, C., Gordon, K., et al: Contributors and inhibitors of resilience among adolescent and young adults with cancer, *Journal of Adolescent and Young Adult Oncology*, 3 (4), 185-193, 2014
- 9) Ahmadi, F., Park, J., Kim, K. M., and Ahmadi, N.: Exploring existential coping resources: The perspective of Koreans with cancer, *Journal of Religion and Health*, 55 (6), 2053-2068, 2016
- 10) Ahmadi, F., Park, J., Kim, K. M., and Ahmadi, N.: Meaning-making coping among cancer patients in Sweden and South Korea: A comparative perspective, *Journal of Religion and Health*, 56 (5), 1794-1811, 2017
- 11) Travelbee, J./長谷川浩，藤枝知子訳：人間対人間の看護，医学書院，東京，14，1974
- 12) 田中まゆこ，藤田佐和：外来で化学療法を受ける進行がん患者のアドヒアランス行動とその意味づけ，高知女子大学看護学会誌，40 (2)，42-52，2015
- 13) 川端愛：がんの集学的治療を断念した患者を支える希望の意味，日本がん看護学会誌，29 (2)，62-70，2015
- 14) 竹山広美，岡光京子：進行肺がん患者の病いの体験の意味づけに関する研究，日本看護福祉学会誌，20 (2)，85-95，2015
- 15) 竹山広美，岡光京子：化学療法を継続して受けている肺がん患者の病いの体験の意味づけを促す援助，広島国際大学看護学ジャーナル，11 (1)，27-34，2013
- 16) 矢ヶ崎香，小松浩子：外来で治療を続ける再発乳がん患者が安定した自分へ統合していく体験，日本がん看護学会誌，21 (1)，57-65，2007
- 17) 雲かおり，太湯好子：肝臓がん患者の苦難の体験とその意味づけに関する研究，川崎医療福祉学会誌，12 (1)，91-101，2002
- 18) 播磨理紗，井上恵美，岩谷恵莉他：経皮的冠動脈インターベンションを受けた狭心症患者の

生活の編みなおし, 日本看護学会論文集: 慢性
期看護, 48, 79-82, 2018

- 19) 藤島麻美, 戸ヶ里泰典, 山崎喜比古: 未治療
の病いをもちながら生きる体験 - SOC理論を
用いた質的データ分析の試み -, 看護研究, 42
(7), 527-537, 2009
- 20) 高樽由美, 藤田佐和: 糖尿病で視覚障害をも
つ人の生活の編みなおし, 高知女子大学看護学
会誌, 33 (1), 17-27, 2008
- 21) 国立がん研究センターがん情報サービス: が
ん登録・統計 最新がん統計, 2020年10月26日,
[https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.
html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)
- 22) 柴田龍宏, 福本義弘: II - 2 心不全の病状
と予後の評価, 木澤義之他 (編), 心疾患・
COPD・神経疾患の緩和ケア, 緩和ケア, 青梅社,
27, 26-27, 2017
- 23) 角田明美, 望月留加, 神田清子: 死を認知し
た再発・進行がん患者が希望を見いだすプロセ
ス, THE KITAKANTO MEDICAL JOURNAL,
66, 201-209, 2016
- 24) 内田真紀, 稲垣美智子: HCV由来肝硬変・
肝がん患者が語る病みの経験, 日本がん看護学
会誌, 19 (2), 39-47, 2005